

開催地名：福井県越前市	
開催日時	令和5年2月5日（日） 13：30 ～ 15：00
開催場所	越前市生涯学習センター
語り部	山縣 嘉恵 （宮城県東松島市）
参加者	越前市防災士の会、各地区防災安全部 約60名
開催経緯	<p>当市の問題点は、災害時の知見の欠如、被災時の実働と運用に関する経験の欠如、女性視点からの防災活動及び運営知識の欠如が挙げられる。この3つの課題を解消すべく、女性の語り部の講演を開催することとしたい。</p>
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>私が住む東松島市は、桃生郡矢本町と鳴瀬町の合併（平成の大合併）によって2005年に発足した。西側に松島町が隣接し、仙台市と石巻市の間に位置しており、ブルーインパルスで有名な航空自衛隊松島基地が近くにある。</p> <p>2011年3月11日の東日本大震災では、本市で震度6強を記録し、想定をはるかに上回る巨大津波が直撃した。それにより死者・行方不明者は、当時の全市民の約3%にあたる1,133人（死亡1,110人、行方不明23人）にのぼった。津波が到来した市街地の浸水域は約65%にも達し、これは全国の被災地の中でも最も高い割合で、農地や漁港をはじめとする産業施設や社会基盤施設も壊滅的な被害を受けた。私が住む野蒜地区では、東側の石巻湾から押し寄せた高さ10メートル規模の津波が内陸2キロ弱を横断し、西側の松島湾に流れ込んだため、野蒜小学校の体育館で13人が、特別養護老人ホーム「不老園」の入所者56人が亡くなるなど、壊滅的な被害を受けた。市内の指定避難所は106箇所に及び、15,000人以上が避難所生活を送った。</p> <p>野蒜地区では、震災前に4,700人いた住民のうち、511人が犠牲となった。震災後の暮らしは選択の連続で、仮設住宅もしくは「みなし仮設」、他地区への移住等の選択を経て、野蒜ヶ丘防災集団移転団地が設置されたが、現在人口は2,700人ほどにまで減少している。</p> <p>（2）東日本大震災時の状況</p> <p>地震発生時、私は自宅に、息子は小学校に、義母は自宅の離れに、夫は勤務先にいた。2003年にあった宮城県沖地震（宮城県北部沖地震）後、我が家では家具をL字型金具で固定したり、家具の上にモノを置かないことを徹底していたので、幸いにして家具の転倒はなかったが、経験したことのない大きな揺れが3分程度は続いた。津波が来ることは予想していたが、1960年のチリ地震津波同様、到達まで時間的余裕があると誤った認識を持っていたために、義母を置いてまずは息子を迎えに小学校に向かった。そして息子を引取り一旦地区センターに待たせておき、義母を自宅に迎えに行って、そして地区センターで3人一緒に合流してから避難所である野蒜小学校の体育館に向かった。</p> <p>野蒜地区には、西から東に東名運河が流れており、避難所の野蒜小学校は運河の北側、自宅は南側（海側）にあった。野蒜小学校までは野蒜海岸から直線距離で1.2キロ（自宅までは600メートル）あり、この運河の北側までは津波が来ないと、地元住民は思い込んでいた。避難所に着いた私たちは、既に体育館は避難してきた住民で一</p>

杯だったため、中には入れずにいた。その時、海側から黒い津波が運河を越えてくるのが見えたため、校舎に向かって走った。私たちは津波から免れたが、体育館にいた避難者の一部に犠牲者が出てしまった。

一方では、混乱を極める災害現場で、実に有難いエピソードもあった。避難所には大勢の住民が避難しているため、安否確認に時間がかかる。阪神大震災を経験してそのあたりの事情をよくご存知の方が、野蒜小学校等東松島市内の避難所を回り、避難者のメッセージをデジカメで撮影してアップしてくれていた。これにより、家族や知人の生存を確認することができた人がたくさんいたのだ。

(3) まとめ

この震災を経験しての思いは、何も知らなかったなという「反省」、自分たちは助かったが、できればみんなで助かりたかったという「後悔」、そして平時に備えられることが多いという「気付き」である。是非みなさんも避難行動についての以下の7つのポイントを家族で確認していただきたい。

- ・家の中の地震対策が有効
- ・避難場所は一つだけでなく複数把握
- ・災害が起きたら、待たせない、待たない、戻らないことが重要
- ・避難場所は災害により使えないところもあることを知っておく
- ・地域の人と日頃からのあいさつが大切（顔の見える関係性の構築）
- ・車での避難も想定した訓練も必要
- ・学校と地域の連携した訓練やマニュアルの確認・共有も必要

今を生きる私たちが未来のためにできることは、伝承していくことであり、伝承から学び、行動を起こすことである。命を大切にすることは、防災に取り組むことであり、人を大切にすることであり、人づくり・街づくりをすることである。未来へつなぐため、命を守るための伝承につながることを祈念したい。



開催地より

「東日本大震災の体験から未来のために今できること」というテーマでお話しいただいた。参加者は、自主防災組織や防災士としての具体的な活動について、イメージできたと思う。本日の講演内容を市民に対する防災活動に落とし込み、防災訓練や啓発事業を展開していきたい。